

講師：所長、他スタッフ 2 名

同行訪問件数：3 件

「小児訪問看護の特徴」について、説明を受けた。

1. 医療的ケア児の多くは学校に行っているため、学校が終わってからの夕方の時間に需要が集中しがちになる。また、兄弟がいるご家庭は、ご兄弟の保育園の送り迎えの時間に看護師入ることもあるそうで、営業時間外の訪問もありスタッフは直行直帰のスケジュールを組まれることもある。医療的ケア児を見ることができ訪問看護ステーションはまだ限られているため、訪問エリアもかなり広く移動時間が長くなってしまいうこともあった。
2. 通院や入院などによるスケジュール変更が多い特徴もある。最近では低年齢（1、2 歳）ころから通園・通所する子が増えている。また、ショートステイの利用も始まっている。医療的ケア児の多くが複数のステーションで 1 週間のスケジュールを組んでおり、各ステーションが週に 2,3 日の訪問が多いため、スケジュールが空にならないような工夫や退院するまでのスケジュールを確保しておくという難しさを知った。
3. 今回同行訪問させていただいた 3 件はすべて入浴ケアが入っていた。介護保険とは異なり訪問入浴や通所での入浴がないため、訪問看護で入浴介助を行うことが多くなると伺った。対象の年齢や体のサイズに応じてお風呂の入り方にも工夫があった。気切をしているお子さんもいたため、ネックシャッターやタオルを巻いての防水を行っていた。
4. 同行させていただいた 3 件ともお母さまが中心となってケアを行っていた。どのお母さまも看護師と同じレベルで吸引や浣腸、ストマの処置などを行うことができた点が驚いた。一方でお母さまが病気になった時が大変であるという事も思った。高齢者のようにショートステイを緊急で利用することも難しいため、通院の時間を作ったりと柔軟な対応が求められることがわかった。
5. 「くれよん」では 7:3 の割合で医療保険の利用者が多いと伺った。対象の年齢は 0 歳～老齢期にも及んでいた。中には赤ちゃんの頃から大人になるまで 20 年以上関わっている利用者さんもいるとのこと。成長にするにつれ、思春期だったり発達段階に応じた関わりが必要になり、ご家族と共にそばで成長を見守っていると話されていた。
6. 「医療的ケア児」の訪問には区市町村が行う在宅レスパイト事業を利用し、訪問することもあり、また「超重症児スコア」というお子さんの病状に合わせたスコアにより、訪問時間などの回数が異なるという制度もあるということも伺った。成人の訪問看護と異なる制度がいっぱいあった。

《研修で感動した内容》

「医療的ケア児」の訪問が初めてだったので、どんな同行実習になるのか不安と楽しみが入り混じった研修でした。今回同行させていただいた 3 人のお子さんは気切や胃ろうがありました。どのお子さんもとても可愛く愛おしいというのが一番の感想でした。抱っこをしながら絵本を読んだり、座って太鼓をたたいたり、お子さんの年齢や発達に合わせた関わりをもつことの大切さを感じました。そして介護するお母さまたちの前向きな姿も印象的でした。朝晩の浣腸、定期的な吸引など、医療的な関わりを家族が持たなければならないという中で看護師の皆様が日々訪問し、指導的ではなく同じ目線で一緒にお子さんたちを見守っているということがご家族の安心感につながっているのだということを感じました。

今回の同行訪問をさせていただくまでは、レスピや気切など医療的なケアのあるお子さんの訪問が（技術的に）できるのか、ということばかり考えていました。もちろんその技術も大切であると思いましたが、それ以上に複雑なスケジュールを柔軟に管理していくこと、そこが私たちのステーションでの大きな課題となるように思いました。在宅で過ごす医療的ケア児の訪問ニーズはさらに高まってくると思います。そのニーズに沿うことができるよう、事業所全体で考えていきたいと思いました。